

## 菅康弘先生のご退職によせて

社会学科教授 阿部真大

菅康弘先生は、2024年3月末をもって甲南大学文学部教授を定年退職されます。先生は、1982年3月に京都大学文学部哲学科社会学専攻を卒業されました。その後、1986年3月に京都大学大学院文学研究科社会学専攻修士課程を修了、1989年3月に同研究科博士後期課程社会学専攻を研究指導認定退学されました。甲南大学には1997年4月に助教授としてご着任になり、2002年4月からは教授として研究、教育に携わっておられます。2017年4月には永年勤続（勤労20年）により表彰を受けています。

ご在籍の間、社会学科主任、大学院人文科学研究科応用社会学専攻主任、教務部長をはじめ、甲南学園広報編集委員会や教職教育センター運営委員会、平生記念栄誉奨学生選考小委員会、甲南大学協定校推薦入学制度に関する委員会、入試制度検討委員会など、数多くの委員会で委員を務められました。

先生のことでまず思い出されるのは、年に一回の社会学科のゼミナールオリエンテーションのゼミ案内文に書かれていた「マジメにフマジメする」というご自身のスタンスです。それは、キャピタリズムとビューロクラシーにのみこまれ「フマジメにマジメする」ことばかりに長けていく我々現代人にとって一種の警句として響くものでした。それを堅苦しいイデオロギーでなく軽妙なユーモアに包みつつ伝えようとする姿勢も先生ならではの、それは現代日本においてとても貴重なものだと思います。

また、私が慣れない神戸の地に赴任してきた際にはしばしば飲みを誘っていただき、社会学について語り合いました。「薫陶を与える」タイプの語りではなく「阿部さんのその話、オモロいなあ」と聞いてくださるので調子によってペラペラと喋りすぎてしまったのですが、自分より若い研究者と「一緒に楽しむ」こうした姿勢こそ、多くの研究者を輩出してきた菅研究室の秘訣なのだと思います。

研究者としても先生は数々の優れた業績を残されました。

現在、Iターンと呼ばれる移住者に関する研究が盛

んになっていますが、先生はそのパイオニアで、本や論文等でしばしば引用、参照されています。一例を挙げると、2021年に刊行され、話題となった中堅の社会学者を中心とした論集『場所から問う若者文化—ポストアーバン化時代の若者論』（晃洋書房）に所収の『『若者の地方移住』をめぐる語り—若者・場所・アイデンティティ』（牧野智和）では、「旅すること」と「住むこと」の融合を指摘した先生の「旅住」の概念が重要な先行研究として引用されています。先生の研究は、後進の研究者たちに着実に引き継がれています。

移住者をまなざす先生の視線には、先に見た「マジメにフマジメする」というスタンスがよくあらわれています。先生は1993年の時点で移住者のアメニティ志向の強まりを指摘していますが、それは当時、エコロジー志向の移住者や都市住民、知識人、ジャーナリストからは「中途半端」なものとして批判の対象となっていました（『ソロー』たち—都市から田舎へ—、『ソシオロジ』第38巻第1号）。「フマジメ」な存在である彼ら「アメニティ・ムーバー」を先生は「マジメ」に研究し、地域社会における彼らの役割を解き明かしました（1998年、「交わることと混じること—地域活性化と移り住む者—」、間場寿一編『地方文化の社会学』所収）。現在、日本における「地方創生」の鍵を握るのは快樂主義的な性格の強いトランスローカル・エリートたちです。郊外化し利便性を増した地方を飛び回る彼らの多くは都市的なエピキュリアンであり、だからこそ、地域社会に新しい風を吹き込むことができている。アメニティ・ムーバーの生態に注目した先生の洞察は時代を先取りしていたと言えるでしょう。

Iターンに関する調査、研究のみならず、先生は宗教に関する調査、研究、デュルケームやジンメルに関する研究も行い、論文も数多く手がけられました。現在は場所論に興味を持たれ、研究を進められているとのことでした。

菅先生、長い間、ありがとうございました。新しい場所論を楽しみにしています。